



作文3部

もんぶかくだいじんしょう
文部科学大臣賞

ごはんと家族のつながり

みやぎけんせんたいしりつたかもり
宮城県仙台市立高森中学校二年

とも
友田理未

わが家はみんな、お米が好きだ。ご飯がないと食べた気がしない。あたたかいご飯をかみしめるとお腹が満たされ、力が湧いているような気がする。またこれまでを振り返ってみると、ご飯は単に食べ物として私たちの空腹を満たすだけではなく、私たちの心をも満たし、家族の間をつなぎ、楽しいひとときを過ごすための大切な役割を担っていることがわかる。

幼い頃からたくさんのおいしいご飯を食べてきたが、その中でも特に印象に残っている食卓がある。それは私の父が作る握り寿司だ。といっても父は寿司職人というわけではない。ごく普通のおじさんであるが、とにかくお寿司が大好きでフェスティバルフーズと言えばお寿司であり、特に自分が作るお寿司にこだわりを持っているのだ。

「今日はお寿司にしよう！」と父が叫ぶと母はややうんざりした顔になる。父のこだわりにつき合うのが面倒くさいからだ。私と兄は嬉しい半面、これは夕食が遅くなるぞ、と覚悟を決める。ほどほどに寿司を作るなどということは父にはあり得ないのだ。

まずはスーパーへ買い出しに行くが一軒で済むことはまずない。納得のいくまぐろやエビ、イカなどのネタがなければ二軒、三軒とスーパーをはしごするのだ。買い出しだけでかなり疲れるが、父は寿司を握ることにももちろん妥協はない。母と兄と私にさまざまな指示を出しながら、小さく丁寧に寿司飯を握ることに集中する。途中、空腹と疲れで必ずといっていいほどけんかになり、母の態度はとても冷ややかなものになる。「さあ食べよう」と父の声がかかった時にはもう空腹で倒れそうだった。

そうして出来上がったお寿司の美味しかったことは忘れない。大きな皿に並んだ寿司を次々に口に入れる。まるで競争のように食べる兄と私を見て父はとても嬉しそうにさらに寿司を握る。さつきまで冷ややかだった母も笑顔になって父と話している。おいしいご飯を囲む食卓は私たちの家族のつながりや楽しさそのものだったのだ。

現在兄は高校生、私は中学生となり家族みんなで食卓を囲むことはあまりなくなつた。野球をしている兄は帰宅が十時頃なので疲れた様子で遅い夕食をとる。私も塾や部活の都合に合わせて夕食を用意してもらうことが多い。そして何よりも、私の父は今年病気で亡くなったのだ。四人で食事をすることは出来なくなつた。私たちの生活の変化につれて「おいしいご飯をみんなで楽しく囲む」という機会はとても少なくなつてしまったのだ。

私たちは「おいしいご飯をみんなで囲む」ということの意味を考え直す時期に来ている。幼い頃に父の寿司を食べた時に感じたのは、楽しさや美味しさと共にわずらわしさも大きかった。何のためにこんなに大騒ぎをして作るのか、買ったほうが早いじゃないか、と思つたものだ。

しかし今の私ならわかる。あの日の父が伝えようとしていた事が、食事はただ食べれば良い、というものではない。家族で食卓を囲んで、話したり、けんかをしたり、笑つたりしてこそ食事なのだ。そして何を食べるのか、も大切である。我が家の場合は誰かが家族のために心をこめて作った「ご飯」が最高なのだ。それを父が教えてくれたのだ。

幼い日に父の作った握り寿司は今も私の心を温め続ける。食卓をみんなで囲む機会は減つたが、おいしいご飯が家族をつなぐということを忘れることなく、心に留めておきたい。そして父の存在は欠けてしまったが、私と兄と母で囲む食卓を大切にしていきたい。